



十勝川治水100年
トークリレー ⑧

十勝の歴史は十勝川から始まりました。基幹産業の農業は治水事業によって発展したと言っても過言ではありません。当社(川田工業)では十勝川の川舟文化史「漂標(みおつくし)」を創立記念で編集製作体系的にまとめました。治水と経済は表裏一体。良いことも悪いことももちろしました。音更は十勝三股からの(木材)流送も受けていた。音更側の対岸出口が帯広。流送が帯広経済を発展させたとも言えます。そのため、川をどう治めるかが最大の難問でした。

十勝川治水100年記念事業

トークリレー



帯広商工会議所 会頭
川田 章博 氏



十勝毎日新聞
令和5年4月30日 2面 掲載

帯広商工会議所会頭 川田章博氏



経済と表裏一体 頑丈な橋

年完成)は音勝静修氏が道庁の技師・横道英雄氏に設計させました。世界初となるアーチ式支保工平衡荷重法を採用。斎藤氏は十勝川治水の父と言われ、治水事業を語る上で外せない存在です。旧橋は私にとって思い出深い橋。当社が解体工事を請け負いました。昔、音更に住んでいた私は母から「十勝大橋の下から拾ってきた」と元談で言われていた。だから社員たちには「橋は僕の家。丁寧に壊せ」と指示したものです。途中、機械のアーチが2回壊れた。100年たっても壊れない頑丈さをこの目で見ました。

その旧橋を、完成から五十年後に現十勝大橋に架け替えを決めた理由は、洪水にあ

りました。十勝川はかつて帯広側で曲がっていて、決壊することも。盛土や音更側の堤防を引いて川幅を広げる、いわゆる木野引堤工事を実施。そうすると、橋長が足りなくなる。85年から98年までの歳月をかけ完成させました。その効果が十分に発揮されたのが2016年に十勝に連続して来た台風。ぎりぎりのところで川の決壊を回避できました。

十勝川は常に十勝の悲しみ、喜びという相反するものを知らせてくれています。治水事業は確実に今日の帯広市の発展につながっています。

十勝川の治水事業は今年、100周年の節目を迎えた。治水事業と関わりのある関係者の思いや将来に向けたメッセージを紹介する。

(随時掲載)

